

第105回 『ニュープロパッチ』

大塚製薬 竹林さん

参加者：川村先生、小西、加藤、味田村、加納、畠山、高橋、野口

パーキンソン病は脳内のドパミン系神経の働きが悪くなり、手足のふるえやこわばり、体の動作が不自由になるといった症状が出てきます。徐々に悪化し、進行すると日常生活にも大きな障害となります。神経変性疾患の中ではアルツハイマー病に次いで2番目に多く、高齢化時代を迎え発症の割合は今後さらに高まることが予想されます。

レストレスレッグス症候群は、一般でいうむずむず脚症候群のことです。主に脚に不快な感覚を覚え、じっとしていられなくなる慢性疾患です。患者さんによって訴える症状は様々で、安静時に症状は強くなるため就寝前に最も症状が現れやすく睡眠障害に陥ったり、日中の会議中など長時間椅子に座しているときにも症状があらわれたりすることがあります。

【効能・効果】

パーキンソン病、中等度から高度の特発性レストレグレックス症候群

【用法用量】

*パーキンソン病：2.25mg 4.5mg 9mg 13.5mg

通常、成人にはロチゴチンとして1日1回4.5mg/日からはじめ、以後経過を観察しながら1週間毎に1日量として4.5mgずつ増量し維持量(標準1日量9mg～36mg)を定める。なお、年齢、症状により適宜増減できるが、1日量は36mgを超えないこと。なお、減量も1週間毎に1日量として4.5mgずつ行う。

本剤は肩、上腕部、腹部、側腹部、臀部、大腿部のいずれかの正常な皮膚に貼付し、24時間毎に貼り替える。貼付部は毎日変更する。

*中等度から高度の特発性レストレグレックス症候群

通常、成人にはロチゴチンとして1日1回2.25mg/日からはじめ、以後経過を観察しながら1週間以上の間隔をあけて1日量として2.25mgずつ増量し維持量(標準1日量4.5mg～6.75mg)を定める。なお、年齢、症状により適宜増減できるが、1日量は6.75mgを超えないこと。本剤は肩、上腕部、腹部、側腹部、臀部、大腿部のいずれかの正常な皮膚に貼付し、24時間毎に貼り替える。

【特徴】

- ・経皮吸収型のドパミンアンタゴニスト製剤では世界で唯一です。
- ・ドパミン作動薬のうち非麦角系に分類されます。非麦角系は麦角系でよく見られる吐き気などの消化器症状が比較的少ないです。
- ・飲み薬は時間経過と共に代謝、排泄されていくために 1 日での血中濃度の変化がありますが貼付薬であれば薬が溶け出していく速度を一定に調節できるため、血中の薬物濃度を一定にすることができます。

◎使用上の注意◎

貼付後、20～30 秒間手のひらで押し付けて完全に密着させましょう。

貼ったところが赤くなったり、かゆくなったりする場合は保湿剤を使うと緩和されます。

(貼りかえるとき、はがした場所と翌日に貼る予定の場所の保湿を行いましょう)

【副作用】

主な副作用として、貼った場所のかゆみや赤み、吐き気、幻覚、ジスキネジア（自分の意志に反して、手足や首や胴体などがくねくねと勝手に動く）、傾眠、嘔吐、頭痛などが報告されています。

重大な副作用

- ・前兆のない急な眠り込み[突発的睡眠]
- ・現実にはない物が見える、ない音が聞こえる、根拠のない主観的な思い込み、軽い意識障害[幻覚、妄想、錯乱、せん妄]
- ・急激な発熱、意識障害、強い筋肉のこわばり[悪性症候群]
- ・全身倦怠感、食欲不振、皮膚や白目が黄色くなる[肝機能障害]

【考察】

ニュープロパッチは 1 日 1 回の貼り替えで 24 時間安定した血中濃度を維持できる製剤なので早朝の運動症状と夜間の睡眠障害の改善が期待できます。

神経変性で嚥下困難を来しているパーキンソン病の患者さんは内服が難しかったりするのでこのような患者さんに適しています。さらに貼付薬は使用状況が視覚的に確認でき、副作用が発現した際には剥がすことで対応できるなど利点が多くあります。

しかし、剥がれやすい、皮膚がかぶれて痒くなったり、赤くなったりする、貼る場所が限られているため面倒であるなど欠点も見受けられます。そのため薬剤師は患者さんの肌のケアの仕方や薬剤が適切に使用できているか投薬時に丁寧に確認する義務があると考えます。

【質疑応答】

- ・パッチがはがれてしまった時の対処法は？

→すぐに新しいものを貼り直してください。そのあとはいつも貼り替えている時間に行ってください。

・ドパミンアンタゴニストの外用と内服の併用はできますか？

→いずれかの処方になると思われるが例外で可能性あり。

(神奈川県では) 保険上併用しても問題ないです。